平成24年度　矢掛町立矢掛中学校学校評価書

校長　　川上　公一

本校のミッション
今日より輝く明日のために ・目的をもって登校できる ・確かな学力を身につける

学級数	１２　学級	児童（生徒・園児）数	３３５　人
職員数	２８　人	家庭数	３０３　戸
学校関係者評価委員	楢崎　裕志（矢掛町人権擁護委員・元中学校長） 安藤　壽司（町費校務員・元小学校長） 小川　公一（矢掛中学校ＰＴＡ） 竹内　浩美（地域支援コーディネーター） 岩崎　恭子（家庭環境改善サポーター） 多賀　千智（特別教育支援員） 諏訪　英広（川崎医療福祉大学）		
専門評価委員	高木　亮（中国学園大学）		

A　成果をあげている　B　ほぼ成果をあげている　C　あまり成果をあげていない　D　成果をあげていない

	領域	中期目標	単年度目標	具体的計画	達成基準	自己評価	評価
1	確かな学力	・学力が確実に身につくようにする。	・学力向上を目指した授業改善を図る。	・各教科の授業で、電子黒板等のＩＣＴを効果的に活用する。 ・各教科の授業で、自分の考えをまとめ表現する場面を設定する。 ・小中高の学校間の連携を図る。	・ＩＣＴ（電子黒板）を効果的に活用して授業改善に努めることにより，無作為に抽出した中低位層の生徒の学力が向上している。 ・７９％（昨年の割合）以上の生徒が、授業中に自分の考えを発表している。 ・小中高連携の活動を年６回以上設けている。	・全国学力調査の結果、国語及び数学のA問題（主として「知識」に関する問題）、B問題（主として「活用」に関する問題）、理科の全てで、全国・岡山県の平均正答率の95％信頼区間の上限を上回っている。国語A・数学Aで全国に比べ上位層がやや多い。国語B・数学B・理科では下位層がやや少なく、中位層がやや多い分布となっている。 ・県下で初めてすべての教科に指導用デジタル教科書を導入し，先進的な授業改革をめざしている。デジタル教科書を効果的に活用することで，わかる授業の構築が可能になり，学ぶ楽しさを体得させ，表現力を向上させることができるようになっている。 ・生徒に対するアンケートでは「授業で自分の意見や考えを伝える場面がある」という項目では77％の生徒が「そう思う・どちらかというとそう思う」と答えているが「自分の意見や考えをすすんで発表している」生徒は39％と低く、改善の必要がある。 ・中学校体験授業、矢掛高校授業体験、全職員が小学校の授業公開に参加するなど、小中高連携の活動を実施している。	A
2	確かな学力		・家庭学習の充実を図る。	・個に応じた家庭学習の在り方を検討し，実践する。 ・保護者が家庭学習に関心を持ち、適切な声かけが行えるよう啓発する。 ・わくわくホリデースクールへの参加を促す。	・７６％（昨年の割合）以上の生徒が、丁寧に課題に取り組めている。 ・学年で統一して家庭学習の充実ための取組を行っている。 ・１００人以上の生徒がわくわくホリデースクールに参加している。	・生徒に対するアンケートでは、「宿題は家できちんと取り組んでいる」との回答は78％であった。保護者の回答もほぼ同じで、実状が正直に回答されていると考えられる。 ・全国学力・学習状況調査で第3学年では、2時間以上家庭学習をする生徒が13％と全国平均より低く30分以上となると全国平均を上回る。家では「宿題しかしない」という状況が観察できる。また、学習塾に行っていない生徒が、46％と全国平均36％を上回っている。 ・「学習のてびき」を全生徒に配布し授業で活用したり、定期テストごとに家庭学習の見直しと学習計画を立てる活動を実施しているが、より実際的な家庭学習の指導が必要である。 ・わくわくホリデースクールの参加者は138名、6日間で延べ548名と多数が参加した。	B
3	支え合う生徒	・支え合い、認め合う集団を育て、社会的実践力が身につくようにする。	・学級経営の充実を図り、生徒の自己肯定感を高める。	・ＱＵアンケートの分析、結果を元に、学級経営の充実を図る。 ・日々の観察による実態把握を強化し，活躍の様子を発信する。 ・生徒の自己肯定感を高める活動を実施する。	・４月のアンケート結果よりも学級生活に満足している生徒が増えている。 ・生徒の活躍の様子や思いが学校通信や学年通信等で公開されている。 ・生徒の自己肯定感を高める活動を３回以上行っている。	・QUアンケートでは学年を追うごとに結果が向上している。第1学年の満足度がやや低い状況が続いている。 ・岡山県学力・学習状況調査では、入学時の第1学年の規範意識・集団所属意識が他学年と比べて低く、改善への取組が急務である。 ・いじめ防止のための「友愛の会」が評価され、取組が複数のメディアに取り上げられた。 ・生徒に対するアンケートでは、「学校で相談できる友達がいる」「学級で当番活動や係活動に責任をもって取り組んでいる」の回答はともに94％であり、昨年度より向上している。 ・学校通信「稜線」をはじめ、各学年の学年通信、保健便り、進路便り等で生徒の活動が毎月公開されている。また、やかげ放送・広報やかげでも生徒の活動が広く広報されている。 ・いじめ防止のための「竹内昌彦講演会」、自尊感情を高めるための「小谷彰吾講演会」、厠ピカ★ピカ隊の活動など、時期を捉えて取り組むことができた。	A
4	支え合う生徒		・社会的実践力が身につくようにする。	・生徒会や専門委員会の活動と連携して、矢掛中学校三つの誇りが実践できるようにする。 ・生徒が主体的に地域の活動に参加するよう支援する。	・９０％（昨年度の割合）以上の生徒が、矢掛中学校三つの誇りを意識して実践しようとしている。 ・５０％以上の生徒が地域の活動に参加している。	・生徒に対するアンケートでは、「掃除ができる」86％「あいさつができる」92％「時間を守る」91％で、昨年と比べ、あいさつ、時間はほぼ同率、掃除はやや少ない回答であった。 ・全国学習状況調査で第3学年では「地域の行事に参加している」48％と回答している。 ・夏休みボランティア体験に、187名(56％)の生徒が自主的に参加し、活動できた。 ・地域の公民館活動に自主的に参加している生徒が増加しているが、地域差がある。各公民館との積極的な連携が必要である。 ・「ふるさと探求」(1年)、「チャレンジワーク14」(2年)、「東京班別自主研修」(3年)など総合的な学習の時間や学校行事を通して、社会的実践力を身につける活動に積極的に取り組み、生徒・保護者の80％以上が満足している。	A
5	生徒の支援	・学校に適応しにくい生徒への支援を充実する。	・学校に適応しにくい生徒への支援を充実する。	・学校行事を工夫するなどして、魅力ある学校づくりに努める。 ・スクールカウンセラーや外部機関との連携を図り、個別のケース会議を行う。 ・小学校との連携，教育相談の充実により，不登校の未然防止に努める。	・生徒が学校に行くことが楽しいと思っている。 ・不適応傾向のある生徒について，専門家と連携して支援方針を定め，状況に応じ他機関の援助を得ている。 ・小学校の授業参観及び情報共有を行うとともに，小学生を招いた行事を実施している。	・アンケートの「学校へ行くことが楽しい」との項目には、生徒86％保護者88％が肯定的に回答している。 ・不登校生徒は、昨年度より減少しており、全国平均を下回っている。適応指導教室から別室登校・教室復帰とステップを踏んでいる。 ・必要に応じてケース会議を行い、組織的な支援を行った。関係諸機関との連携やスクールカウンセラーによる保護者・生徒のカウンセリング、登校・通所時の支援員の協力が効果があった。また、別室支援担当を町教委が派遣し、対応することで3名の生徒が別室登校できるようになった。 ・不登校生徒の中に学校に対して関心が向かない生徒が2名おり、家庭環境改善サポーターが窓口となり支援している。 ・全職員が小学校の授業公開に参加することを目標に小中連携の活動を実施している。	A
6	生徒の支援		・特別支援教育の充実を図る。	・教職員・支援員が密に情報交換をし，個別の支援を充実させる。 ・関係機関，専門家，保護者と連携し，個別支援を充実する。 ・特別支援教育に関する校内研修を行う。	・安心して充実した学校生活を送っている。 ・学校，家庭，地域で支援方針を共有し，一貫した支援を行っている。 ・関係機関と連携し，事例毎により適切な支援方針を定め，支援している。	・知的障害学級4名、自閉・情緒障害学級6名の特別支援学級2学級に対し、学級担任3名、特別支援コーディネーター1名、特別支援員2名を配し、支援を行っており安心して充実した生活が送れている。 ・自閉・情緒障害学級の在籍者の内2名は、集団行動を著しく苦手としており、それぞれ個別の支援を多く設定している。 ・通常学級に在籍する生徒の中に発達障害または発達障害の疑いのある生徒が複数見られ、関係諸機関とのケース会議、専門家の助言等を得て指導を行っている。 ・特別支援学級在籍の3年生3名について、自立支援とともに進路保障について一貫した指導を行っている。	B

分析・改善方策

3年間の中期学校経営計画の最終年度である。平成24年1月1日に学校運営協議会を立ち上げ、コミュニティ・スクール化を図ることができた。地域に開かれた学校づくりが一層進み、地域に支援され地域を支援する学校としての位置づけがほぼ完成した。地域関係諸機関との連携した取組が評価され、学校保健について文部科学大臣表彰を受賞した。
・全国学力調査等の客観的な調査ですべての学年で平均値を上回っており、学力が確実に身につくようにすることができた。家庭学習については、全体的に学習時間が少ない状況である。民間教育機関との連携など新たな方策を模索している。「わくわくホリデースクール」には昨年に引き続き多くの生徒の参加が見られたが、学年によって意欲、意識の差が見られた。町教育委員会と協議しながら来年度に向け取組方法の改善を図っていきたい。
・QUアンケートは、生徒の学級での満足度尺度として客観的な資料となり、学級経営充実に向けての一助となっているので、今後とも継続して実施し、支え合い認め合う集団を育てていきたい。いじめ防止のための「友愛の会」の活動も充実させていきたい。「我武者羅②応援支隊」の活動をはじめとして、地域活動に積極的に参加することが増加し、社会的実践力が身につくようになっている。今後も自己肯定感を高める取組を企画していきたい。
・中1ギャップの克服が本校の大きな課題であるという共通認識のもと、取組を継続しており不登校生徒の数は着実に減少している。適応指導教室「ひまわりの家」との連携の成果が現れており、別室登校・教室復帰ができた生徒も見られた。不登校生徒の中には家庭の支援が期待できにくい生徒もおり、関係諸機関の支援を期待する。
・特別支援学級に在籍する生徒の数が増加しており、障害の程度にあわせた支援が困難な場合もあるが、できるだけ個に応じた指導をしようと努力している。通常学級に在籍する生徒の中に発達障害または発達障害の疑いのある生徒が複数見られ、対応に苦慮している。これらの改善のためには一層の人的資源の充実が必要である。

学校関係者評価

1．確かな学力
①全国学力学習状況調査において全国平均正答率を上回っているのは，学力向上の今までの取組が結果となって表れている。ICT等を有効に活用した授業がなされていて，成果が上がっている。
②小学生を招いての合同授業など小中高の学校間の連携を図る取組がなされ，学習への取組の意識の向上や新しい環境へのスムースな移行といった効果が大きい。
③家庭学習については，時間，内容ともにまだ十分とは言えない。生徒だけでなく，保護者に対する意識づけや具体的な取組が必要と思われる。
2．支え合う生徒
①矢掛中学校3つの誇りを意識して実践しようとしている生徒が90％に達しているのは，今までの継続した取組の成果と考えられる。今後も，マンネリ化しないよう工夫し，取組を継続してほしい。
②いじめ防止や生徒同士の仲間づくりのための「友愛の会」や講演会等工夫した取組がなされている。人権意識や規範意識を高める指導は今後も継続してほしい。
③QUアンケート結果より，学級満足度群の割合が高くなっているが，今後も生徒一人ひとりの不安感が解消されるような指導・支援をお願いしたい。
3．生徒の支援
①不登校生徒に対しては，適応指導教室やスクールカウンセラー，家庭環境改善サポーター等との連携した取組がなされ成果が見られる。学校に適応しづらい生徒や保護者に対して今後も継続的な対応が必要と思われる。
②特別な支援を必要とする生徒が増えており，教職員・スクールカウンセラー・支援員等の指導・支援体制をさらに充実させる必要がある。また，専門家を招請した研修会等の教員研修をさらに充実してほしい。
4．総論（全体として）
①校長のリーダーシップのもとに取組の方向について共通理解が図られ，教員は連携・協力して教科指導や生徒指導に熱心に取り組んでいる。
②教員が「自信をもって」「矢掛中に勤めてよかった」と思えるような中学校であってほしい。また，教員がゆとりを持って職務を遂行するためにも，可能な限り職務内容の精選を図ってほしい。
5．設置者等への要望
①施設・設備面
校舎の設備・施設はよく整備できている。さらに次の点をお願いしたい。
・グランド，テニスコートの状況は，安全面から考えても，整備が必要である。特に，グランドは，中学生だけでなく，地域住民の利用も活発になされているので，早急に取り組んでほしい。
・新教育課程において，必要となった教材，教具を整えてほしい。
②人事面
県や町独自の対応で加配をしていただき，成果が上がっている。さらに次の点をお願いしたい。
・特別な支援を要する生徒に対し個別指導・支援を担う人員を増員してほしい。また，現在の支援員は，教職員及び生徒と非常に良好な関係を築いているため，次年度も継続してもらいたい。
・スクールカウンセラーの勤務時間を延長してほしい。

専門評価

評価項目	観点	学校の現状（〇優れている点　△改善が望まれる点）	改善の方向性
1，自己評価の状況	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	〇取組・成果それぞれの自己評価の方法論が具体的・数量的で的確である。国民，県民および矢掛町民に対して理想的な説明責任を果たしている。 〇基礎学力習得の改善成果を上げていることが数量的に把握できる。また，知識・技能の活用や学習意欲についても改善が認められる。これは数年間の学校の自己評価と改善意欲の大きな成果であると指摘できる。 △全国一斉学力学習状況調査以外の教科の把握が見えにくい。高校受験に関わるため，ニーズは５教科いずれにおいても高いはずである。英語や社会科，また進路保障の参照となる各種成果指標の把握と提示が有効であろう。	中学において学力の課題は進路保障と密接にかかわる問題であろう。基礎学力の習得状況や高校進学において進路を切り拓く，高校以降での進路に適応し，矢掛町を支える住民となっていく上での「矢掛で求められる学力」が矢掛中学校では充分意識されている。そのアピールがもっとあってもよいと考える。
2，コミュニケーション力の向上	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	〇学校内外での挨拶の活発さと素直さが地域住民より高い評価を得ており，ボランティア参加者の原動力となっている。清掃や各種活動，生活習慣，授業規律もコミュニケーション能力育成により担保されている部分が大きい。 △自己評価で学校が危機感を持っているように，第１学年および特別支援的課題を有する生徒の人間関係の形成能力に課題がある。潜在的な生徒指導上のリスクといえるが，課題の認識自体は健全な学校の姿勢でもある。	今年度，生徒指導上の危機が顕在化していない原動力は，矢掛町における加配等の各種人的資源のご高配によるところが大である。今後も矢掛町有権者および設置者においては充分なご理解とご高配をお願いしたい。
3，不登校児童生徒の解消	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	〇第３学年の以前の不登校者数解消は保護者より「全幅の信頼」とまで高い評価を成している。長期的で着実な取り組み姿勢の成果は称賛に値する。 〇中学校学齢期で生じやすい課題は日常的に起きている。不登校問題の予防や積極的対応に献身し，現状ではその点に充分な努力と成果が見られる。 △福祉や特別支援的課題など中学校進学後初めて顕在化する課題が増加傾向の中，なんとか問題化を防いでいる状態である。今後の予断を許さない。	不登校を始めとした生徒指導問題は「中 1ギャップ」的課題が目につく。目覚ましい各取組みの中で小中連携が目立たない印象を持つ。7小1中という特殊性を踏まえた小中連携の枠組みを矢掛町を挙げて考慮することが有効かと思われる。
4，学習不振児童生徒の解消	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	〇家庭学習支援の課題や「わくわくホリデースクール」などの学習習慣形成の努力とICTなどの機器活用が学力不振対策に注力されており，高い効果をあげている。 〇「確かな学力」が試験等で測られる“基礎基本の知識・技能の習得”だけでなく，“知識・技能の活用”（コミュニケーション能力育成等）や“学習意欲”（QUアンケートや「わくわくホリデースクール」等）に熱心な取り組みを成している。 △将来の矢掛町を支えるための“求められる学力”の視点を学校は充分に持っているが，矢掛町有権者に分かりやすいアピールがもっとあってよい。	客観的で詳細，数量的で専門的な自己評価が素晴らしい説明責任を果たしている。一方で関係者評価などの作成プロセスでは，非専門家たる町民により分かりやすく「矢掛の学力とその成果，将来の可能性」を語ることが有益であろう。
5，学校の組織運営	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	〇教職員が体調を崩しても，そのフォローに多くの教職員が支えあっており，高い“現場力”は称えるに値する。 △昨年度も体調を崩す教員が出ており，現行の加配・支援の現状でも教職員の多忙と余裕のなさに課題が目立つ印象である。 △矢掛町の学校が特徴的成果を上げる一方で，異動してきた教職員と異動していく教職員が矢掛の特徴に“異動ギャップ”つまり不適応感を感じやすい印象がある。	「多忙でも，やりがい確保で多忙感を改善」が近年の教職員への配慮であった。しかし，充実感とは別に職務上の適応や心身の健康には多忙改善自体の配慮が不可欠であることが示された印象がある。多忙自体の改善を一考されたい。
6，学校と保護者・地域社会等との連携協力	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	〇制度上学校の教職員では充分には手が届きにく課題も多いなか，コーディネーターをはじめとした地域住民の協力と参加により支えられている。また，参加地域住民の充実感も高く，双方にとって実りの多い関係を構築できている。 〇地域福祉コーディネーターの協力もあり，従来困難であった家庭支援にも成功を収めている。矢掛の地理上，特別支援や福祉の専門機関と距離がある。地域の取組みとして，これらのインフラ整備に有益な可能性が伺える。	学校支援を形成する地域住民の動機には矢掛町の子どもの挨拶と素直さ等のコミュニケーション能力が源である。地域住民により頼もしく協力的になってもらう(冷たく攻撃的にもなってもらわない)ために生徒の変化が有益と思われる。
7，特別支援体制の整備	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	〇現行の矢掛町の加配や様々な立場の方々の協働と組織化に基づいて，特別支援学級がなんとか安定に成功しており，教育成果を上げている。 〇関係機関に協力を仰ぐ部分と，中学校の教職員の能力開発や組織化の取組による学校の活性化が見事に使い分けられており成果を上げている。 △通常学級において特別支援的課題を有する生徒が少なくない。当該家庭や社会福祉，出身小学校との連携に課題と困難さが伺える。	矢掛中学校の単位学校経営では充分に努力を行っており，努力で乗り越えられない課題が見えつつある。つまり家庭と地域の社会福祉，小中連携等の課題である。単位学校経営を超えた地域教育経営の枠組みの一考を設置者に求めたい。
8，学校の総合的な状況	〇学力面でも体験活動の側面でも様々な取り組みを積極的に積み上げている。また，相対的に特別支援の課題の多さや通塾率の低さといった地域的課題を乗り越え，学力成果指標は痛快な大健闘を果たしている。矢掛町民の今までの期待に充分に取組と成果で応えているといえる。 〇中期学校経営計画をはじめ，昨年度，今年度各種学校評価の実情を鑑み，矢掛中学校と同学区(コミュニティとしての矢掛町全域，7小学校区の合計)の教育に最も優先度の高いニーズは教育を支える人材と人材の能力開発，ネットワーク作りにあると確認できよう。従前以上の矢掛中学校への加配や人的支援とともに，矢掛全域の特別支援，福祉，学校間連携を支えるネットワークの整備を矢掛町民と設置者にお願いしたい。		

来年度の重点・方針

1　確かな学力
・「確かな学力」として，基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ，これらを活用して課題解決に必要な思考力，判断力，表現力等を育み，主体的に学習に取り組む態度を養う。
・授業時間数を確実に確保し,教科ごとの達成基準・評価規準を明確にして授業を質量ともに充実させることで，標準化された学力調査において安定して全国平均を維持する。
・家庭学習の一層の向上を図る。PTAの協力をもとに，保護者が関心をもって適切に援助できるよう啓発するとともに，「わくわく学習」事業を活用し，土曜日の学習のあり方について検討していく。
・全ての教科で電子黒板や指導用デジタル教科書等のICTを効果的に活用し，学ぶ楽しさを体得させ，表現力を向上させる授業を構築していく。
2　支え合う生徒
・生徒の社会的自立を促し，豊かな人間関係づくり，学習指導の充実，生徒会活動の充実，家庭との連携など創意工夫を生かし，生徒・地域・職員にとって魅力ある学校づくりを推進する。
・「地域に支えられ　地域を支える学校」として，生徒が主体的に地域の活動に参加するよう支援し，参加の状況を積極的に公開する。
・達成の状況については，アンケートに基づく分析を主とするが，日々の観察による実態把握を強化し様子を学校通信や学年通信で積極的・具体的に保護者生徒に公開する。
3　生徒の支援
・特別支援コーディネーターを中心に教職員・支援員が密に情報交換をし，個別の支援を充実させる。通常学級に在籍する支援が必要な生徒を把握し必要な支援を行う。
・生徒指導上の課題の克服を喫緊の課題として捉え,生徒が数多くの成功体験を積み，失敗から学び，仲間と励まし合いながら成長する土台となる，心に響く生徒指導を展開する。
・すべての生徒が「目的をもって登校できる」ことを本校の使命として捉え，不登校・別室学習の生徒に対する個別・具体的な支援が一層充実させる。
・不登校の未然防止につながる小・中連携の効果的な取組を行い予防策を講じるとともに，スクールカウンセラーや外部機関との連携を一層密にする。
・文部科学省調査における不登校発生率，暴力行為発生率，いじめ発生率を全国平均より大きく下回るよう数値目標を設定し，その達成に努めるとともに，成果を数値的に評価者に示す。
4　総　論
・コミュニティ・スクールとして，地域とともにある学校の在り方を研究し，地域と学校をつなぐマネジメント力の強化を図る。
・地域の高等学校との連携を強化し，過疎化高齢化の進む地域での新たな学校の役割や教育のあり方を模索する。
・心身ともに健康な教職員が魅力ある学校づくりの基盤であることを明確にし，教職員の多忙感の解消のために,業務や行事の削減，効率化・能率化，業務の協力体制や精神的支援体制の確保，校内人事の見直し等を実施していく。